

『雪と造林』に取り組む研究グループ — S51年の担当者会議から —



岐阜県寒冷地林業試験場

戸 田 清 佐

昭和45年10月、富山県林試に、豪雪地帯の公立林試5県が自主的に集まり、豪雪地帯林業技術開発協議会が発足した。

時に、林野庁が積雪地帯における造林の隘路を打解して、造林推進のための適切な対策を講ずる目的で、実施した「豪雪地帯造林推進対策調査」が終了したのを契機としたものである。

しかし、豪雪地帯における育林技術体系を確立するには、未解決の問題が多すぎることから、各県に共通な課題については、設計やとりまとめ方法を統一したり、情報を交換し、試験研究を合理化しようとする関係の公立林試が独自に協議会を設けるにいたった。

協議会は、45年の富山県をかわきりに、新潟県、山形県、石川県、福井県、岐阜県の順で場長会議と担当者の現地検討会を重ねてきた。この間、毎年度の研究成果の発表、共通課題と試験設計、メニュー課題の検討、雪質調査の研修等々いざいざ、林野庁、国立林試の担当官の助言を得て成果をあげてきたのである。

しかし、このようにしてあがった成果については、実際に普及におおされているものも多く、豪雪地帯における造林推進の一翼をになっていると自負するものであるが、いかんせん、本協議会には財政的なうらづけがなく、運営については、幹事県が苦勞しているのが現状である。

しかるに、今回、木原財団から本協議会の「豪雪地帯の造林技術に関する研究グループ」に対し、助成されることがきまり、これを機会にこれまでの試験成果とその普及について小冊子を発刊することになった。研究業績については、詳細を研究報告にゆずるが、この小冊子では、研究者の苦勞話をおりこんだ普及版をねらって編集してみた。

この『雪と造林』が多くの林業家をはじめ、普及にたずさわっている方々に利用され、ご批判をいただければ幸いである。

なお、この機会に、雪害防止のための試験研究や本協議会の性格を理解していただくために、簡単に研究グループを紹介してみた。

三浦義之



みうら・よしゆき 秋田県林試 岩手大(院) S 46

育林科に席をおき、試験場においては雪害試験にとり組む研究者として4代目にあたるとのことである。

少なくとも10年は一つの研究を続けたいと、雪に対しては異常な意欲を示し、現在は、秋田県における雪害の実態もつかんで、積雪環境の調査に力を入れている。S51年度は、秋田県で研究会が開催されることになっており、今から、研究グループを、どのあたりの雪山へ案内しようかと考えているところである。

佐藤啓祐



さとう・けいすけ 山形県林試 岩手大 S 33

本協議会設立当初からのメンバーであり、グループを常にリードしてきた研究者の一人である。

雪害に関する研究業績も多く、キャリアも豊富なことから、全てお見通しという感じもするが、協議会の今後の発展に欠かすことのできない研究者である。

国補のメニュー課題のような共同試験は、画一的にやろうとすることが多いので、彼はこのやり方にかなり批判的だ。「試験実施環境の違いに大きな意義があるのだから、これからは、各県独自の設計で試験してとりまとめて行くべきだ」という。

野表昌夫



のおもて・まさお 新潟県林試 岩手大 S 42

新潟県は、我が国最高の豪雪地帯に属するところであり、雪に関する試験研究も早くから進んでおり、試験環境にもめぐまれているところである。

従って、雪に関する試験研究成果も多く、彼の提唱する豪雪地帯の造林地帯区分は広く知られ、造林の指針となっている。

また、試験成果は、県内各地に実験展示林という形で再現し普及や研修の場にするなど、技術の啓もうにも努めている。

町田賢一



まちだ・けんいち 新潟県林試 宇都宮大 S 47

若い研究者の代表でもあるが、雪にめぐまれた新潟県の研究への力の入れ方がうかがわれようというものである。

野表氏のよき協力者でもあり、後継者としての今後の活躍が期待される。

早川 武彦



はやかわ・たけひこ 富山県林試 東京教育大 S 37

造林課はえぬきのベテラン研究員であるが、もとは育種関係の試験研究に取組んでおり、さし木や接木などの増殖試験をはじめ、選抜、交雑、検定などには、多くの業績を残している。

雪に取組むようになって日は浅いが、持ち前のねばりと熱心さで着実に成果を上げつつある。

北中外 弘



きたなか・そとひろ 石川県林試 松任高 S 30

加賀白山山地の豪雪地帯をかかえる石川県で、クワジマスをはじめとする耐雪性品種を持ち、階段造林をはじめとする雪害防止技術を駆使して一人懸命に雪と戦っている。

技術普及は、SPやAgにまかしておくわけにいかず、研究員自ら生来のまじめさで、研究と平行して進めているので、全く忙しい。

安井 洋二



やすい・ようじ 福井県林試 三重大 S 40

現在は特産課に席をおいているが、もとは育林課にあって育林関係の試験研究を担当していたので、雪害に関する試験だけは持参して転課した変りだねである。根っから、雪に関する試験研究が好きなのでもあるが、足でかせぐタイプの研究者で、今日も早くから、大きなリュックをかついで、山を歩いていることだろう。雪に関する研究の成果が上るには、10年以上を要するのであるが、彼のような根気のある研究者がこつこつ続ける試験が近い将来大きな成果をもたらして呉れるのではなかろうか。

山口 清



やまぐち・きよし 岐阜県寒冷試 斐太実高 S 35

森林立地を専門に研究員になってから、すでに15年、雪に取組んでも久しい。肥培試験では、雪害回復の促進に成果を上げ、雪起しでは大井式を見つけ出すなど、研究と同時に普及にも見るべき成果をおさめてきた。

すでにベテランの域に達してきたが、持ち前の馬力はあらゆる困難をのりこえ、たゆまぬ前進を続けるであろう。

雪は今年も必ずやって来るし、どこかで大きな被害をもたらすかもしれない。しかし、これを予防するだけの技術はまだ確立されてはいないが、毎年同じような造林はくり返されるのである。

これからは、安全を第一に考えた造林方法を検討してゆくだらう。